

ことばから芸術へ（3） — 基礎・専門科目間の学術的相互作用 —

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 京都市立芸術大学美術学部 公開日: 2021-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 玉井, 尚彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15014/0000000381

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0
International License.



ことばから芸術へ (3)

—基礎・専門科目間の学術的相互作用—

A Linguistic Approach to Artistic Activities (3):

Academic Interactions between Basic and Advanced Subjects

Naohiko Tamai 玉井 尚彦

1. はじめに

前年度に引き続いて、「ことば」の研究・教育に携わる一員として、芸術を専攻する学生に長期的な目で見たとときのような貢献が可能か、という問題意識を持って授業の工夫に努めている。2020年度も、1回生を主な対象として学術目的の英語使用を念頭に置いた一般英語授業(Academic English 1)・2回生以上対象の「原典資料研究」・大学院生対象の「言語表現論特講」といった場を通じて、各々の授業目標に沿う形で「ことば」を考察する要素を含めている。

今回も、昨年度の報告(玉井 2020)と同様に、一般英語授業と原典資料研究を中心に考察するが、扱った内容は異なっている。まず、今年度前期の「原典資料研究 1」は、「ことばの世界への誘い」という副題のもとに、ことばの科学の入門的知識と、文のニュアンスの差として把握しやすい内容、といった一般性の高い構成を意識した。これは、この科目と交代で隔年開講している「原典資料研究 2」が、「ことばの構造—文の世界—」という副題のもと、文に内在するメカニズムを統語論的知見も紹介しながら探る理論的性格が強いのと対照を為す。今年度「原典資料研究 1」の方を担当したことで改めて、基礎的内容・専門的内容を扱う授業の間でどのような学術的相互作用が期待できるか、考察する機会が得られた。

今年度はコロナ禍のために遠隔授業への形態変更を余儀なくされた。これには限られた時間・個人差のある通信環境という条件下で対面授業に近い効果を実現するために悩む側面も多かった一方、新たな方針の積極的導入を試す機会という側面もあった。具体的には、特に最初のうちは受講学生の通信環境を確認しながら方針を確立するのに時間を要したこともあり、当初もう少し時間を割く予定であった社会言語学・神経言語学といったト

ピックに十分に触れることができなかった。その一方で、毎回授業サイト上で意見の提出を課し、まとめた内容を提示しながら次回授業に役立てる、という回路が円滑に進んだ手応えも持っている。

2. 「ことば」に改めて向き合う機会

—一般英語授業での取り組み—

一般英語授業では2016年度から、前期に一度、言語に関する大まかなテーマを設定して話し合うグループワークを行い、そこから受講学生の興味を抽出してテーマを絞った上で後期にもう一度同様の試みを行っていた。しかし2020年度はコロナ禍の状況下で前期は、授業時間が減少したため読解材料を進めるので手一杯の状況になったこともあり、実施を見送った。しかし、大学における英語学習とはいわゆる「読む・聞く・書く・話す」といった技能面の習得だけではなく、英語をひとつの手段としての個別言語と認識しより広く「ことば」の全体像を知る入口とすることでもあるので、オンライン授業でもせめて一度は実施すべきであると考えた。そこで後期(12月後半)に一度、ちょうど学期途中から本学授業で使用する Google Meet で使用可能になったブレイクアウトルームを用いて学生間でグループワークを行う形で実施した。

対面で話し合う状況でない分、普段よりも討論の活発化を促す工夫が必要と考えた結果、テーマを複数提示することで自由度をもたせた。具体的には、「ことばの面白さとは?」「ことばと芸術の関係とは?」「こんなことばがあったなら?」などを例に、さらに自由なトピックも認めることにした。グループあたり6~8人(グループ数はクラスにより3または4)でまず話し合い、担当者も時々各グループに入って話の流れを確認した上で助言を

行い、その後全体に向けて各グループの討論内容を発表し合う、という手順で実施した。例年はブレインストーミングと全体の要約の目的で各グループに用紙を配布していたが、今回はその代わりに、Google Document を共有して学生に書き込んでもらう形にした。この工夫は、全体発表の際に共有画面で全体に提示しながら説明できる点で便利であった（紙の場合と異なり、絵を描いてもらいくいのは残念であった）。

以下に話し合いの中で出てきたトピックの中からいくつか取り上げて考察する。

- (1) a. ことばと芸術の関係（例：作品のタイトル、漫画におけるフォントや文字の大小による印象）
- b. 語彙と文化（例：日本語では「牛」の分類として「雄牛」「雌牛」など「～牛」の形になるところが、英語では ox, cow, bull など語幹から異なるものが複数ある。）
- c. 語がもつ意味の広さの通言語比較（例：日本語「夢」も英語 dream も、将来の夢と睡眠時に見る夢の両方に言及できる。）
- d. ある言語にはあるが別の言語にはない表現（例：日本語の敬語の分類、マレー語の pisang zapra（「バナナ1本分の時間」の意））
- e. オノマトペに関する考察（例：日本語で、「ふわふわ」「さらさら」など軽い感じを表すものには /s/, /w/ といった音素が入る一方、「どろどろ」「ぐるぐる」などにみられるように濁音は激しさを表す。）
- f. インターネット文化を含むスラング（例：英語で as soon as possible の略語 ASAP、日本語の（笑）と英語の lol¹）
- g. 翻訳について（例：ある歌詞で「食む」が英語版で eat と訳されていたが、それでは日本語特有のニュアンスが失われてしまうのではないか、など映画や歌詞に着目した考察や、日本語の1人称表現の多様性）
- h. 文法的性の区別（例：フランス語・イタリア語・スペイン語などにおける男性名詞と女性名詞の区別）

言語と美術の関連というのは関心が高いと思われる、実際（1a）のような答もあったが、今回の全体的傾向としては、より微視的な視点から表現を考察した答の方が多かった。まず（1b）や（1c）のような気付きがみられたが、これらを出発点として言語学上の理論の紹介に話を広げることも可能である。具体的には、（1b）はことばで世界をどのように切り分けるかという話で言語相対論の紹介に結び付くし、（1c）は意味拡張の過程の類似性とい

う認知言語学的視点から説明がつく。さらにより広い認知科学的な視点との結びつきを考察する材料として、（1d）に挙げたうち時間の表現というトピックも興味深い。今回は詳細に踏み込む余裕はなかったが、人間は時間の継続・経過・一連の出来事といったものを大きさ・動き・位置といった空間的概念を通して理解するがそこにも言語間の差がみられ、「過去＝後ろ・未来＝前」以外の形の把握をする言語が存在する、といった話題との関連を考えることも可能な応用であろう。² 音声に着目する上では、（1e）は音韻論的な分析との接点（田守・スコウラップ 1999）を紹介するのに格好の題材であり、実際3節でも述べるようにオノマトペに関心をもつ受講学生は多い傾向がみられる。（1f）や（1g）は、理論的な説明をすぐに関連づけるのは容易でないものの、身近なことばの使用への観察眼を伺うことができる。さらに（1h）については複数のグループから言及があったが、表面的現象にとどまらず、その由来を調べようと試みた例もあった。文法上の性は無生物にも存在しかつ通言語的に一致するとは限らない、ということで普段はこの区分自体は前提として話を進めていたので、こういった着眼も今後の授業の参考にできればと感じる。

特に（1d）や（1h）における議論では、受講学生が並行して情報を調べやすい、オンライン授業の利点を活用した部分を伺うことができた。ただ反省点もある。特に、インターネットを参照することで多くの関連情報が得られる利便性の反面、掲載されている情報を無批判に受け入れてしまう可能性も同時に存在する。³ 尤も、中には関連する論文をオンラインで探して紹介したケースもあり、典拠不明でない信頼度の高いソースを探そうとした努力は評価できる。ただこの場合も、当該分野の専攻でなければ、それが主流の説なのか否かまでは判断が困難であろう。これは特に一見して興味を引くようなトピックの場合、注意するべきである。時間があれば、同じトピックに関する複数のサイトの検討などによる深化が可能であるが、今回のような30分程度の話し合いではそれには時間不足であったと思われる。以上は教室での対面授業の場合でもスマートフォンなどを参照すれば起こりうることなのだが、今回、全員がインターネット接続可能な機器を使いながら話し合う状況になったことで、可能性が高くなっていったと思われる。宿題形式にして発表の論理性まで問う方法も考えられるのだが、一般英語授業の一部という位置付けを考えれば、今の形のままその場で思いついたことを出し合ってひとつの方向性を探るブレインストーミング的な性格を保つことも、自由闊達な議論を引き出す上では有効かと判断している。ただし今後の取り組みの際には上記のことも意識して臨みたい。

授業終了時の小レポートに、「[前略] 英語の授業でこのような課題が出されるということに驚きました。」という答があったが、これこそがむしろ、英語学習は英語という個別言語の技能を磨くだけでなく「ことば」を知る一つの過程なのである、という気付きへの契機になると考える。「改めて言語について考える機会は普段生きている中で珍しいので、たくさんの発見が得られました。共通点も相違点も両方見つかり、言語の奥深さを重ねて実感しました。」という答もあったが、まさに「普段当たり前のように使っているものに向かい合う」ことこそが主旨なので、今回、オンラインでの実施が円滑に行くか不安もありながらこの試みを実施したのは正解であったと感じている。

3. ことばの世界への誘い —原典資料研究での取り組み—

授業開始にあたっては突然のオンライン化という要素を考慮し、受講学生のコンピュータ環境および慣れの度合を尋ねることによって、どの程度を画面・音声を伴った形式で行い、どの程度をドキュメントへの書き込みなどを軸に行うか、決定する参考にした。必ずしもすべての学生がビデオ通話に慣れているわけではないことが判明したものの、他の授業での使用も含めて慣れる機会があるかと思い、また本授業では基本的な使い方にとどめることも念頭に、リアルタイムで実施するがビデオ通話 (Google Meet) ・音声ファイルのダウンロード・ドキュメントへの書き込みを内容により使い分ける方針を立てた。初めのうちは通信環境が未整備である可能性も念頭に、テキストおよび説明を録音した音声のファイルを配布して併用することで Google Meet の使用時間を抑える形から出発し、最終的にはことばの説明の部分は全て Google Meet での実施に移行した。

内容は当初の予定通り、(科目名のとおり)「原典資料」に今後挑戦するときのためのスキルを磨くこと・「ことば」の世界への入口を見ること、の二本立てとした。今回はこのうち後者の「ことば」の世界に関する部分に注目して論じる。⁴ 当初、以下の構成を予定していた。

- (2) a. ことばにおける形と意味
 - b. 談話とは (情報の新旧・語順・指示と照応)
 - c. 言語類型論
 - d. 社会言語学
 - e. 神経言語学

基本的な前提の紹介として (2a)、表現のニュアンスを理論の俎上に載せることへの分かり易い入口として (2b)、

さらにことばに対する一般的関心と結びつけて (2c-e)、と意図していた。しかし今年度はコロナ禍の状況下で授業時間が減少し、実際には (2a-c) のみを扱った。さらに、授業進行に伴って受講学生の関心を提出物で確認したところ、(2a) を当初の予定よりやや拡張して扱うことになった。その結果、言語学の諸分野を体系的に俯瞰することはかなわなかったものの、オンラインの環境を活かして感想を毎回詳細に確認したことで、受講学生の関心を考慮した適切な軌道修正ができた手応えを持っている。以下、いくつかトピックを取り上げて、受講学生からの意見およびそれに対応した軌道修正の例を紹介する。

まず、(2a)「ことばにおける形と意味」の中で、人間言語における特性のひとつとして「恣意性」を取り上げた。「恣意性」とは、記号内容 (シニフィエ) と記号表現 (シニフィアン) が必然の結びつきでないことを表す。たとえば、脚で支える上面の板の上に本などを置いて作業をするのに用いる物体と「机」という音声の間には、必然の結びつきがあるわけではない (英語の desk でも、他の個別言語でも同様)。ことばを音と意味のペアと考えるとき、両者の関係を考える上でこれは重要な点である。しかしオノマトペの場合は、母音 /i/ と「高い音調」 (例: screech, scream, squeal, squeak, shriek, beep, ping) の対応にみられる音象徴のように、両者が独立と言い切れない状況がみられる。このことを紹介した授業で、次のような感想があった。

- (3) a. 恣意性の話で、普通、「水」「water」という言葉そのものには水らしさや水の音みたいなのは無いけれど、オノマトペが例外で、言葉とそのものらしさが直接結びつくのが面白いなと思いました。
- b. 恣意性のある言葉 (抽象的な言葉) がいつ頃から使われるようになったのか気になりました。なんとなく、人のはじめの言葉はオノマトペのような感じだったのではと思いました。
- c. [前略] 擬態語 (ふんわり、すっきり)、擬容語 (ふらふら、ゆるゆる)、擬情語 (イライラ、しゅんと) は、どうなのでしょう。擬態語と擬容語は視覚的に見える姿や動作を表していて一見具象的と捉えられるような気がしました。心理的な様子を表している擬情語は、実際に心の動きを見ることはできませんが、心理が行動に表れて具象的になり擬容語のように使えないのかと思いました。これらの言葉は恣意性があるという認識でいいのでしょうか。

このうち、(3a) は説明内容を分かり易くまとめた感想といえる。当初はこの内容が把握できればまずは次の内容に進む予定であったのだが、(3b, c) などの感想に見受けられる疑問に対応するべく、この部分をもう少し次の授業で掘り下げた。まずは (3b) に応える形で、人間のことばの起源との関係を扱った。ことばの起源として古くから存在する説に、確かにオノマトベ起源説（ワンワン理論 bowwow theory）というものは存在し、「音声模写（+ジェスチャー）＞擬音語＞擬態語＞一般語」という順序が想定され、それが語彙獲得の流れとも合う（秋田 2019: 200-201）、という説があることを紹介した。同時に (3c) に応える形で、擬態語的なオノマトベとして、(4) のように色彩のオノマトベがある言語もあるという話を紹介した。

- (4) a. タラルタラル (*taral-taral* 真っ白) (ムンダ語)
 b. ピュスー (*pysu* 深紅) (チェワ語)
 c. ユイボー (*yiboo* 黒) (エウエ語)
 (秋田 2019: 193)

この回の授業に対する感想には、以下のように興味深い分析がいくつかみられた。

- (5) a. [前略] 色彩のオノマトベは不思議に思います。形を音でおきかえるというのは、まだイメージしやすいのですが、色を音に置き換えるとなるとイメージするのは少し難しいです。ただ、色というのも音と同様に、ある種「波長」であるので、そのあたりで何か関係してくるのかな、とも思いました。
- b. タラルタラルという音声と、真っ白という視覚的なイメージがつながることが不思議な感じがした。音声から視覚的イメージにたどり着くまでにどのように情報が変換されるのか気になった。
- c. 色を表すオノマトベがあると知って驚きました。[中略] よく考えると日本語の「しんしん」というオノマトベは「雪が降る」という特定の様子を表し、誰しもが「白色」を想起させることができると思いました。また、「ぼかぼか」と聞いて「真っ青」を想像する人はあまりいないように思います。(これらは「色」の前に、風物や温度が人の感性に訴えかけているため、上のような想像ができると考えられます。どれも直接的に色を形容するオノマトベではありませんが) という風に考えると、タラルタラルもピュスーも少し理解できるような気がしました。「白色」が持つ「静けさ」や、「赤色」が持つ「温かさ」を表したい時

に、そのような「色を直接的に表すオノマトベ」が生まれるのかなと思いました。

これらの感想からは、情報処理のメカニズムという視点が伺えるのと同時に、特に (5c) では通言語差への着目もみられる。そこで、日本語と他言語のオノマトベを比較する上で、より言語理論に近い側面も紹介しようと考え、(6, 7) のような例を提示した。

- (6) The path *zigzagged* down the hillside.
 (7) a. I ran out, *banging* the door behind me.
 b. The window *banged* shut.
 (Longman Dictionary of Contemporary English, 5th ed.)

ここで動詞として用いられている *zigzag*, *bang* ともに、位置変化・状態変化とそれに伴う様態をひとつの動詞で表現するパターンであり、これは英語でオノマトベ以外にも観察される。この発想への導入として、次の (8, 9) を見て何か気付いたことを尋ねてみた。

- (8) a. Terry *swept*.
 b. Terry *swept* the floor.
 c. Terry *swept* the crumbs into the corner.
 d. Terry *swept* the leaves off the sidewalk.
 e. Terry *swept* the floor clean.
 f. Terry *swept* the leaves into a pile.
 (9) a. Pat *ran*.
 b. Pat *ran* to the beach.
 c. Pat *ran* herself ragged.
 d. Pat *ran* her shoes to shreds.
 e. Pat *ran* clear of the falling rocks.
 f. The coach *ran* the athletes around the track.
 ((8, 9) Rappaport Hovav and Levin 1998: 97-98)

突然このような質問をすると答の範囲がオープンすぎて難しく感じられたようだが、創造的な答から受講学生の考え方を知って授業に役立てたいので、敢えて最初の問い方はオープンにしている。今回の場合、最初 (8) だけでは答が出にくかったが、*run* が他動詞的に使われている意味で特徴的な (9) に注目するようヒントを出すと気付きやすいようであった。いずれの場合も、c～f の文では、位置または状態の変化と、「～することによって」という様態が1つの単語で表現されている。

次に、(2b)「談話とは」という内容での試行をめぐる考察に触れたい。ここでの談話 (discourse) とは、いくつかの文が連なって全体としてひとつのまとまった内容を

もつものであるが、出発点として「(10a) と (10b) はいずれも複数の文から成りますが、両者の違いは何でしょうか？さらに、そのように考えた理由は何でしょうか？」という問を出した。

- (10) a. We will go to the zoo tomorrow. The kitchen knife was broken by the nurse who we hired last week. The President adopted a new policy, but my father bought a new bicycle for John. Three years ago, I started to study French although Bill said unexpectedly that the earth is flat.
- b. I walked through a park. The trees were already green. In a beech was a beautiful woodpecker. It seemed to me whispering that summer had come.
- (福地 1985: 9-10)

談話という概念を考える上で、まず言語学専攻でない学生からノーヒントでどのような答が出るか、を知ることが有用と考えて出題したが、(11) にみられるように、理論的側面に近い答から創造性をもった自由な答まで、多様な答が得られた。

- (11) a. (10a) は節同士や文同士の意味のつながりがないが、(10b) は文脈がある。(10a) は全体を通して、何を伝えたいのか分らないと思ったので。
- b. (10a) は文の繋がりがバラバラで、文章全体の情景を想像するのが難しい。(10b) 文の繋がりがスムーズで、文章全体の情景をイメージしやすい。
- c. (10a) は文法の間違ひはないが、各文につながりが一切ないので、読めるがいたいことは理解できない。[後略]
- d. (10a) の文章は、複数の文それぞれが独立した内容になっていて、文章全体が繋がっていない。(10b) の文章は複数の文が関連していて、全体が繋がった内容になっている。理由は、(10b) の文章だと a park → trees → a beech → a woodpecker などは頭の中で関連づけられる名詞であり、例えば『自然』などの言葉でカテゴライズできるけれど、(10a) は名詞も動詞もばらばらで、関連づけることができないからだと思います。
- e. (10a) は人物描写。明日動物園へ行く予定の家族を、一人ずつ順に現在の描写をしている。一瞬関係の無い文章が並列して繋がらないように思えた。しかしこの家族のエピソードで、家庭内の雰囲気が高まることを意図していると思われた。これから動物園でこの家族にどのようなことが起きるのかを想像させる文章のように感じた。

[中略] (10b) は情景描写。私 (I) 目線で夏の公園の自然の様子を描写している。前文の公園、木、樺木、キツツキを次々と形容していているため、文章に繋がりがあるように思えた。詩的に直接比喩表現を用いながら情景を描き、夏の自然の美しさが伝わるように感じた。[中略] どちらも小説の一端のように人物と情景を形容する文章で、人物を次々と焦点を当てた後に、家族全体を想起できる文章と、公園からだんだんと焦点を絞って、最後に夏という全体を想起できる文章だ。(映画のカメラワークであれば (10a) はカットが入りそうだが、(10b) はカットなしでアップしていきそう) 文章の繋がりの有無が相違点のように思った。(10b) は前文の一部を形容していているため容易に繋がりがわかるが、(10a) は形容する対象が変わるため繋がりがわかりづらい。

まず、(11a) で「文脈」というキーワードへの気付きがみられる。このタイプの答は他にも複数あったが表現の仕方は多様で、(11b) は「情景」と捉えている。また、(11c) で「文法の間違ひはない」というのも重要な気付きである。(11d) はさらに理論面での的確性に近づいた答といえる。これは言語学という連想照応を直感的に捉えた説明であると同時に、それと連結する「範疇」「上位概念・下位概念」といった要素をも「カテゴライズ」という言い方で捉えることができています。一方で (11e) は、創造的側面に注目した答ということが出来るかも知れない。福地 (1985) は (10a) を談話として適切でない例で挙げているのだが、(11e) は「しいて (10a) を使うならどのような場面か」という視点から考えたものであろう。今回は時間の都合でそこまでは発展させられなかったが、「自分で面白い一節を、日本語で作成してみる」といった課題を試してみても、深い考察が可能な独創的な答が得られたかも知れないので、今後の参考にしたい。

あと、(2c)「言語類型論」についてはあまり時間を割くことができなかったのだが、普段限られた言語のみを扱っていると見えない現象というのは、意外性から関心を持つようであった。たとえば語順についていえば、基本語順が SOV の言語 (日本語など: 41.0%) の方が SVO の言語 (英語など: 35.5%) より多いこと、さらには基本語順なしの言語が 13.7% 存在すること (長屋 2019: 187)、といったことが意外であったという感想や、二言語使用者におけるコード・スイッチングの仕組みへの興味などが感想の中で言及されていた。

なお、最終授業で感想を自由に記してもらったが、「言語というものは感覚的に理解している部分が多かったの

ですが、『何となくおかしいけど何故かわからない』ということなどを言語学的是にしっかりと説明できることが面白いなと思って授業を受けていました。[後略]」「[前略]言語学についてしっかり学ぶことが初めてなので、このような学術的な法則があるのかと知るだけで面白かったです。」といった言及をみると、理論のフィルターを通してことばをみることを紹介したことにも意義はあったかと安心するところである。

4. 今後の展望—各科目の相互作用から得るもの—

概論的な授業の展開においては、その分野を専攻しない学生の中にも学問的興味が芽生えるように構成する方法が課題となる。ただ、たとえば自分の作品にどのようなタイトルをつけるかを考える、といった作業は各専攻の実技やテーマ演習の中でも行うものであろうから、今回議論の対象にした授業の中ではそのような作業を実体験しながら学ぶというよりも、ある程度理論的な側面を（興味を失わない程度に調整しながら）提示している。

今後の展開を見据えるとき、各科目の内容構築における相互作用を考えることは大きな意義をもつ。まず今回、一般英語科目と原典資料研究1の両方でオノマトペを出発点とした音韻論的考察に関する意見が得られ、これは昨年度の考察（玉井 2020）を再確認した形になる。今回触れる時間が足りなかった社会言語学・神経言語学（2d, e）参照）についても、今後他の授業でも話を含めながら学生の関心の度合を見て参考資料としたいが、既に今年度の授業にヒントにできる内容がある。社会言語学の場合、一般英語科目で敬語についての考察が今回ある（1d）参照）し、原典資料研究1で二言語使用者の話を出しているので、そこで得た感想を展開に応用できる。今後の一般英語科目での試みで観察される関心の方向次第では、方言・非言語伝達（ノンバーバル・コミュニケーション）などを扱う可能性もある。一方、神経言語学の場合、原典資料研究1で恣意性との関連で、形と意味の対応が成り立たない場合について失語症にも言及したが、そこで得た感想を言語発達の話題に応用し、さらには文の生成メカニズムを議論する原典資料研究2と連関を見出すことも考えられる。⁵

以上のように、各科目の相互作用を授業カリキュラム全体の改善につなげることで、言語学・英語学専攻でない美術学部の学生ならではのことばの学びを形成していきたい。尤もこれはどこかで完成形ができあがるものではなく常に改良を施し続ける性質のものであることを意識し、知的好奇心を創造に活かす意欲を持った学生の期待にどのように応えるか、引き続き工夫を模索していきたい。

註

- 1 laughing out loud に由る。
- 2 Cooperrider and Núñez (2016) では、この前後が逆転する言語をはじめ、左右や上下と対応する言語、丘の上方・下方と対応する言語などの存在を紹介している。
- 3 たとえば次の意見は、その点への気付きの一端を示したものと解せるであろう：「バナナ1本分の時間」は日本語で言うことわざみたいなものなのかなと思いました。近そうなのでは古代中国の故事成語もあると思います。そう考えると「バナナ1本分の時間」にも裏話みたいなものがあるのでは？と感じます。
- 4 今回は詳述しないが、美術に関連する文章読解の部分においても、登場するアーティストに関するパフォーマンスやインタビューの動画などの情報を受講学生から寄せて頂き、授業に直接応用したことも何度かあり、ここでもオンライン授業のメリットを感じた。
- 5 今回は議論しなかったが読解においても、一般英語科目や言語表現論特講（大学院科目）でことばをトピックとした文章を取り上げる、という形で連関を見出すことが可能である。実際、註2で言及した Cooperrider and Núñez (2016) は2016年度の言語表現論特講で取り上げたことがある。

参考文献

- 秋田喜美 (2019) 「オノマトペ」窪園晴夫（編著）『よくわかる言語学』 pp. 192-201. 京都：ミネルヴァ書房。
- Cooperrider, Kensy, and Rafael Núñez (2016) How We Make Sense of Time. *Scientific American MIND* 27 (6): 38-43.
- 福地肇 (1985) 『談話の構造』東京：大修館書店。
- 長屋尚典 (2019) 「言語類型論」窪園晴夫（編著）『よくわかる言語学』 pp. 182-191. 京都：ミネルヴァ書房。
- 玉井尚彦 (2020) 「ことばから芸術へ（2）—理論的側面への誘いを授業へ—」『京都市立芸術大学美術学部研究紀要』64: 121-126.
- 田守育啓・ローレンス＝スコウラップ (1999) 『オノマトペ—形態と意味—』東京：くろしお出版。